

民俗芸能に内在する信仰感情の特質について

西 崎 専 一

我が国における民俗芸能の多くは、言うまでもなく何らかの宗教行持としての性格を持つものとして、神事ないしは仏事の庭に発生し伝承されてきた。そしてそれらの示す宗教性の特質は、学術的に体系化され儀式化された行持とは異つて、一方では直接的な祭祀性を持つと同時に、他方では芸能としての資質によってそれに参加する民衆の信仰感情を感性的に表出し得るという点に存する。宗教的認識が常に超越的・非論理的な存在者への判断を含んでおり、超越的他者に対する感性的―象徴的志向のうえにはじめて論理的な教学体系が組み立てられ得ることを考える時、宗教行持としての民俗芸能の持つこの特質は様々な宗教的形式を生み出す信仰のエネルギーをその直接的な動態において提示するものとして貴重な意義を持つことになる。ただ、豊穰祈願・悪疫祓といった外的な祭祀性の直接的表現と超越者への志向の象徴的表出という、宗教的表象の二面性を包括し得るような形態を持つ芸能の伝承は今日では稀な現象となりつつある。その理

由としては、このような性格を示す芸能は民衆の生業の間をぬって年のごく限られた期間に演じられるものであるにもかかわらず、それに参加する人々の日常的な関心が究極的にはすべてそこへ一元的に集約され得るものでなければならぬのに対し、近代の社会状況を背景にした民衆の生活意識の多様化がそのような芸能の存続をほとんど不可能にする程に進んだことが考えられる。この状況下における稀な例のひとつが愛知県北設地方の山間に伝承される花祭はなまつりである。本稿はこの花祭に対するいささかの実地調査の過程で感じられた、この芸能を今日にまで伝えることを可能にした民衆の宗教意識についての報告である。

現在奥三河の三町村十七の村落で伝承されている花祭の形態は、ごく一部を例外として、典型的な神仏混合の様式を示し、また花太夫とか宮人みやうとといった祭の中心的推進者の認識もそこに落着くようである。ただ、花祭における神仏混合はその行次第の全体を通して示されるのではなく、次第の中心

を構成する歌舞はかなり徹底した湯立神事の形式を見せるのに対しその前後に位置して直接的な祭祀に関わる行持はおそ

らく中世の山嶽仏教にまでたどり得るであろう修験密教的な色彩の濃いものであるという特色を持つている。花祭をめぐることの二つの宗教性は、江戸末期（正確には安政二年）まではおそらくその各々の性格を強く表わす二様の花祭の形態として平行して演じられて来たものと思われる。その一方は現行の花祭形態の直接的な先駆であり、各村落の民衆が地域の霜月祭として年一回花宿を設けて催したもので、内容は湯立神楽の歌舞を中心とする神事としての色彩の濃いものであったのに対し、他方は教年に一度、土地の古老に依ると四ないし七年おきに、奥三河山間部の二・三ヶ所を巡る形で開かれた祭で、密教的祭祀が修験者の行持の大成として詳細を極めて展開されたと言われる。この二態のうち花祭の初期形を歴史的に伝えるのは言うまでもなく後者である。前者、つまり現行の形態は修験密教的行の大成としての花祭に何らかの形で参加した民衆がそれを、おそらくは修験者とともに、各々の地域に持ち帰り、各地の霜月祭として定着させたものと想像することができよう。おそらく各地域への土着化が進行し、修験者の生活もそれらの中へ吸収されていった時、民衆の日常性との関わりを持たない宗教的行持としての祭は自然に消えていったのであろう。そしてこの土着化の過程で付与され

た性格が今日の花祭りの在り方を決定づけていったものと考えられる。

われわれが各地の花太夫や宮人と接して第一に感じることは、花祭を何らかの固有の宗教性ないしは信仰の表現を内包したものは全くみなしていないという事である。この地方の宗教的情況は、中世の密教的山嶽仏教から近世の曹洞禪の支配を経て、廃仏を契機としてほとんどが神道に転化したのであるが、花祭の形態はそれらの変化とは全く別の次元で維持されてきたと言う。花祭の祭祀性の中核は、現行の祭がいかにもそれらしい形態を示す産土・氏神信仰ですらなく、さらに民衆の日常性に密着したなにかであった。花太夫とか宮人といった花祭に関する世襲の役職の発生について、古老の語るところに依ると、宮人とはその村落に花祭が導入される以前から定着していた家であって、祭の導入に際してその祭神として各個の家の祭神を持ち寄ることのできた者であり、祭の司祭者である花太夫には宮人のなかで指導的立場にあった者、多くの場合にはその村落に定住し祈禱などの祭祀に従事した修験者の系統の者が任せられたという。この説を採るとすれば、花祭は個々の家の祭神に対する神事を村落共同の事業として催すための形式ということになるが、これは祭の次のような性格からもほぼ肯首できるように思われる。まず、当時の一集落の戸数は五ないし十戸であったがこの数

は現在の各地域の宮人の数と一致すること、さらには祭の会場である花宿は年ごとに集落内の民家を巡回して設けられていたが花宿の選定は何か立願の事柄のある家よりの申し出を原則に決定され、宿主が祭に關する財政的な責任を負うかわりに村落全体が祭の神事によってその願の成就を願うといった、家祈禱・家浄めのな形態をとっていたこと等である。このような事情のゆえに、花祭の祭事が示す修験的・寺院芸能的な形式とそれを各村落へ定着させていった人々の宗教意識の間には必然的な連関は存在しなかった、言葉をかえるなら花祭の初期形が持っていた祭事形式とその表現内容との直接的な統一性は、その形式が民俗芸能化される過程で破られたと考えられる。郷社の臨時祭として催される現行の花祭においてすらその次第の全てを統括する固有の宗教的の中核の存在が不明瞭であるのは単にその習合的形態にのみ依っているわけではない。

このように奥三河の民衆が花祭の吸収に際して、直接的には祭の形式のみを受け入れ、その形式の志向対象である密教の理念を土着的な素朴な産土信仰の類に置き換えたことが、この芸能がその基本的な形態を崩すことなく今日に伝承され得る最大の要因であろう。なぜなら、この置き換えによって彼らの日常性とは無縁の宗教的理念にわずらわされることなく、また周囲の宗教的情況の変化に影響されることなく湯立

神楽を構成する歌舞に没頭することが可能となったからである。勿論、宗教行持としての存在理由を確保するため神楽に先行する高嶺まつり・辻がためといった祭祀の形式も伝承されるが、現在ではそれを司祭する花太夫自身がその形式に固有の宗教性及び神楽に対する積極的な意味についての認識を持ち得ていない。事実この修験的色彩の濃い祭祀は神楽に対する一種の導入部を構成するものであり、神楽の行われる領域を清浄に結界しそこに悪疫の浸入するのを防ぐという従属的な意味を担うに止まるように見うけられる。ある花太夫に依れば、かつては高嶺まつり・辻がための形式を太夫が正確に行じ得るか否かにその年の花祭が無事に務められるか否かがかかっているとされたそうであるが、この事も先の事情を示すものといえよう。つまりそこでは直接的な祭祀はすでに花祭の領域の外に在ると観られているのである。

花祭における特殊な祭祀性の排除を端的に示す他の例が、花太夫の持つ宗教的な地位の問題である。世襲職である花太夫は単に花祭の司祭者であるばかりでなく村落の宗教的生活の中心者であり、郷社の管理や葬祭、家祈禱等の業にほぼ専門に従する立場にあったにもかかわらず、公式の宗教的地位、廃仏以後であれば資格づけられた神職の地位を保有している者は極めて少ないのである。同じような事情は現在の花祭の基盤となっている郷社そのものの在り方にも示されてい

る。例えば北設地方でも最も古い由緒を持つ郷社のひとつとされる布川の祇園社は今日まで一切の公式の社格を持っておらず、厳密な意味では神社とすら言えないのである。花太夫の神職としての地位と役割、及び郷社の存在とその運営はただその村落の共同体としての意志にのみよって規定され認められていくにすぎない。花祭に関わる宗教的要件をめぐるこのような閉鎖性のなかに、われわれは祭を形式的にも理念的にも共同体としての村落の空間のなかに止め、そこに彼らの領域の外にある何物の介入も許容しないという強い意志を感じることはできないであろうか。

かつて北設の山間に他から隔絶して位置していた十戸に満たない集落にとって、その集団が共同体として日常の全体にわたって有機的に機能することを除いてはその生活の維持はあり得なかつたであろう。一個人、一家庭の存在は共同体そのものの存在と不可分の関係におかれており、共同体を構成する相互の有機的な関係の維持は、彼らの日常におけるほとんど無意識の、そして本来的な関心事であつたはずである。花祭とは彼らにとってこの関心に与えられた形式であり、それを意識化し実体化するための祭祀であろう。それゆえ花祭を支配するものは神事の感性的な形態の外に存在する概念的対象ではなく、祭の場に集う人々の個的な自意識を湯立神楽の陶酔的な群舞のうちに吸収し集団のエネルギーへと転化し

ようとすると共同体の意志である。そして神事の感性的形式は共同体の意志を実体的なものとして把握しようとすると民衆の意識の動態そのものであり、同時にその動態が作り出す集団のエネルギーの具現である。それゆえ花祭の形態はそれを支配する共同体の意志を祭の超越的志向対象として内包しており、祭祀行事の具体性をこえて直接的に宗教行持なのである。花祭から概念的な宗教性を排除しようとするのはその行持としての純粋性を確保しようとする民衆の意志の表われであろう。

現在花祭はひとつの変化の節目にある。若年層の流出によって舞い手が減少して行くという状況を背景に、文化財の指定を受けたこともあってその保存と運営を各村落ごとにはなく北設地方全体で総合的に考えていこうという機運も既に具体的に進行しつつある。しかしある花太夫がこのような現象を指して「花祭の自壊行為である」と語るのを耳にした時、花祭を何世代も支えて来た共同体の声を聞くような思いがしたのである。

※紙幅の都合により註は全て省略しました。

(名古屋音楽大学講師)